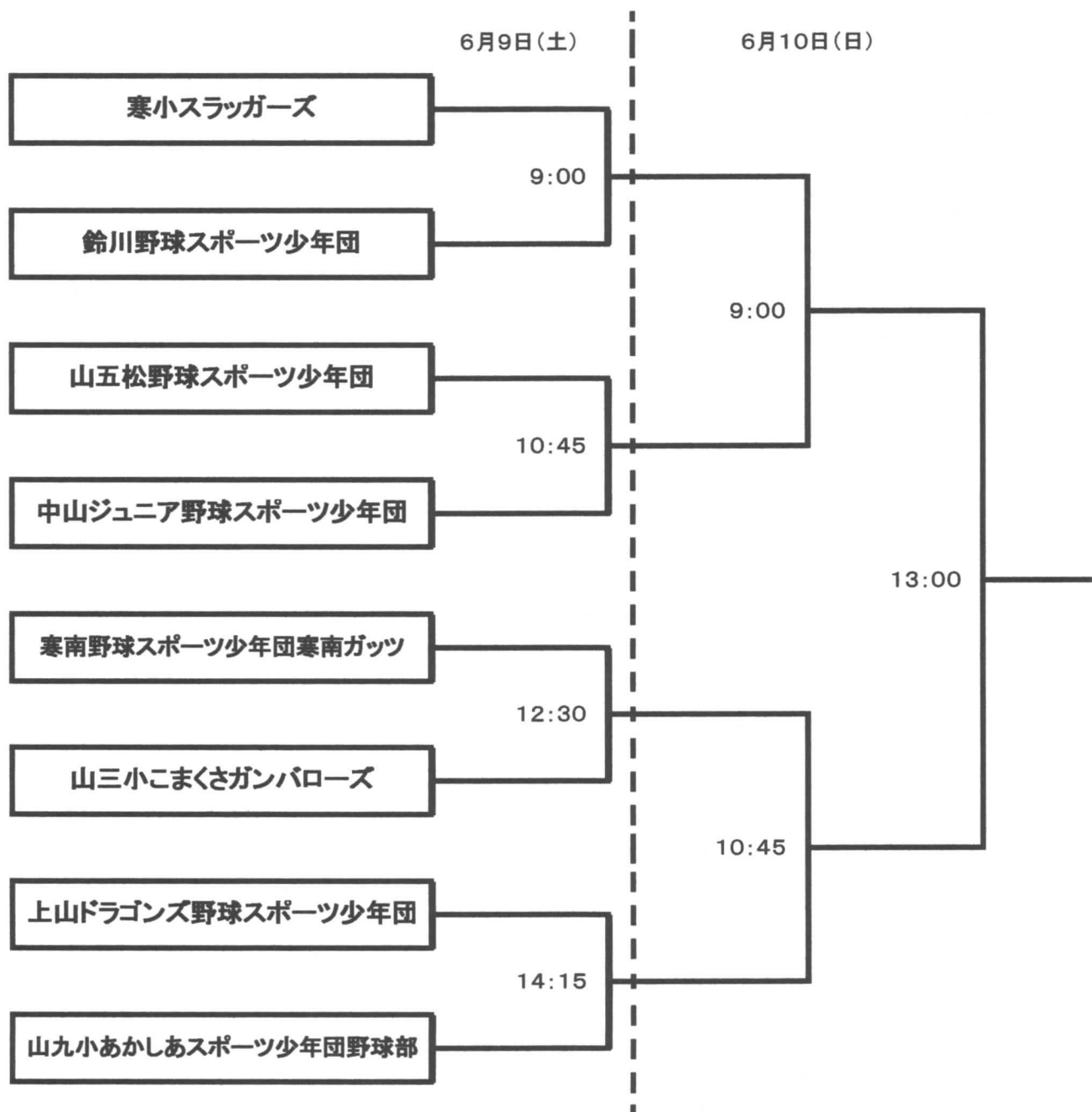


高円宮賜杯第32回全日本学童軟式野球大会

山形地区予選 組み合わせ

2012年6月9日～10日

山形市野球場



平成 24 年度

高円宮賜杯第 32 回全日本学童軟式野球大会山形地区予選会要項

1. チーム登録について

- ①一チーム選手 20 名以内（背番号 0～27）、監督 1 名(背番号 30)
コーチ 2 名以内(背番号 28、29)まで登録できます。主将は 10 とする
- ②ベンチに入れる人員は①のほかに、チーム責任者 1 名、(成人に限る)
マネージャー 1 名、スコアラー 1 名までです。
- ③チーム登録は学校単位、選抜チーム等任意の形態でも可能です。
- ④平成 24 年度の登録締切は、平成 24 年 5 月 24 日までとする。
- ⑤ユニホーム等は同一意匠とする。
- ⑥全国大会に出場する場合はチームのユニホームと左袖に県名を入れる。
- ⑦登録申し込み先はメールで下記とする。

○送り先アドレス 佐藤 喜芳 kiyo@y-ctc.jp

〒990-0021 山形市小白川町 4-1-33

山形地区野球連盟事務局長 佐藤喜芳(090-3755-2021)

2. 登録料、大会参加料について

- ①登録料はなし。
- ②山形地区大会の参加料は 1 チーム 3,000 円とする。

3. 山形地区及び県予選会の日程について

- ①山形地区の予選会は 6 月 9～10 日に山形市野球場で開催する。
- ②抽選会及び監督、主将会議は別紙の通りとする。
- ③県大会は 6 月 30～7 月 1 日に酒田市で開催されます。(山形 2 チーム参加)
- ④県大会の組み合わせは既に県野球連盟総会で、決定しております。
(抽選会当日お知らせいたします)

4. 東北大会及び全国大会について

- ①県予選会準優勝チームは 8 月 11～12 青森県で開催される第 16 回東北学童軟式野球大会に出場する権利を得る。
- ②県予選会優勝チームは 8 月 12～17 日東京都で開催される全国大会に出場する権利を得る。

5. 大会規定等

- ①全日本軟式野球連盟規定等を準拠して実施される。
- ②山形地区大会は全日本軟式野球連盟規定を適用して実施されるが、山形地区の特別規定等もあわせて実施する。

6. その他

- ①全日本軟式野球連盟規定等に違反した場合、地区に対する罰則があるので熟慮のうえチーム登録をしてください。
- ②雨天の場合でも、現場においては試合可能・不可能の判断をしますので必ず球場に集合お願いいたします。

平成 24 年度高円宮賜杯第 32 回全日本学童軟式野球大会山形地区予選会
の監督・主将会議・組合せ抽選会についてのお知らせ

☆抽選会時日 平成 24 年 5 月 26 日(土) 9 : 30 より

☆抽 選 会 場 山形県野球場会議室

☆登録申込み締め切り

平成 24 年 5 月 24 日(木)までメールにてお願いいたします。

☆出場チーム数

計 8 チーム

☆登録・参加料

参加料 3,000 円 (登録料はなし)

計 3,000 円を抽選会の時に持参下さい。

問い合わせ

携帯 090-3755-2021

山形地区野球連盟 事務局長 佐藤喜芳

山形地区野球連盟

高円宮賜杯第 32 回全日本学童軟式野球大会

山形地区予選会組合せ抽選会

2012.5.26

1. 開会の挨拶
2. 会長挨拶
3. 役員紹介
4. 協議運営上の注意と改正規則の説明（山形地区野球連盟審判部長）
5. 質 疑
6. 抽 選

オープン抽選とする

受付番号の若い順に予備抽選。予備抽選番号の若い順に本抽選
（寒河江地区の2チームはブロック別の抽選とする）

※ 参考資料

- ・ 学童軟式野球大会要項（2012）
- ・ 大会組合せ表
- ・ 2012年度 野球規則改正

1. ベンチに入れる人数

ベンチに入れる人員は、監督1名、コーチ2名以内、選手10名以上20名以内及びチーム責任者（引率者）、マネージャー、スコアラー各1名とする。監督、コーチ、チーム責任者は成人とする。

背番号は監督30番、コーチ29、28番、主将10番、選手は0番から27番。チーム責任者もチームの野球帽を着用すること。

2. 試合方法

(1) トーナメント方式とし、全試合7回戦または1時間30分以内とする。

得点差によるコールドゲームは、5回以降7点差とする。

(2) 7回を終了し、または3回を過ぎて1時間30分を経過して勝敗のつかない場合最終選手9名による抽選により勝敗をつける。抽選方法は、従前通りとする。

3. オーダー交換

① 各チームは球場到着時に本部に報告し所定のオーダー表を受取、第1試合は試合開始予定時間40分前、第2試合以降は前試合の4回終了時本部席で行う。

② テーピング等の必要な選手も同行し審判員の確認を受けること。

4. 注意事項

(1) 試合中、打者、走者、次打者、ベースコーチは全軟連公認の耳つきヘルメット、捕手はマスク、ヘルメット、プロテクター、レガースを着用すること。

(2) ユニフォーム、帽子、ストッキング、スパイク等については、全員同色、同意匠のものでなければならない。

(3) 試合中監督に限りグラウンドにでて指示することが出来る。

(4) 試合のスピード化に努めること。

(5) 抗議の出来るものは監督と当該プレーヤー。ルールの適用間違いについてののみ。

(6) タイムは7イニングに3回までとする。

5. 試合中の禁止事項

(1) バットリング、鉄パイプ等の球場へのもちこみ。

(2) 投手の手首にリストバンド、サポーター等の使用（負傷で包帯を巻く時は球審の承認を得る。）

(3) 足を高くあげてのスライディング（妨害となったと審判員が認めた時、守備妨害で走者をアウトにする）

(4) 作為的な空タッグ（妨害となったと審判員が認めた時は、オブストラクションを適用する）

(5) 走者が塁上に腰を下ろすこと。

(6) 相手チーム及び審判員に対する聞き苦しい野次は厳禁。またスタンドからの応援団の野次及び目に余る行為はチームの責任とする。

(7) 少年部・学童部の投球制限については競技者必携（2012）30項十七②を採用する。

★試合中の禁止事項については競技者必携（2012）競技運営に関する連盟取り決め事項及び競技に関する連盟特別規則（学童野球に関する事項）に規定されているとおりに遵守すること。

大会運営補助員のお願い

チームからボールボーイの協力をお願いいたします

2012年度野球規則改正及び規則適用上の解釈について

2012年度競技者必携の改正について

平成24年3月25日

山形地区野球連盟審判部

2012年度 野球規則改正

(1) 2・76に次の文を追加する。

しかし、塁または走者に触れると同時に、あるいはその直後に、ボールを落とした場合は“触球”ではない。

野手が塁または走者に触れた後、これに続く送球動作に移ってからボールを落とした場合は、“触球”と判定される。

要するに、野手が塁または走者に触れた後、ボールを確実につかんでいたことが明らかであれば、これを落とした場合でも“触球”と判定される。

(2) 3・15を次のように改める。

① 4行目のカッコ内を次のように改める。(傍線部を改正)

試合に参加している攻撃側メンバーまたはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く。

② 【付記】を削除し、【原注】の冒頭に次の文を追加する。

本条で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については、7・11参照。審判員による妨害については5・09(b)、同(f)および6・08(d)、走者による妨害については7・08(b)参照。

③ 【原注】に次の例を追加する。

例—打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。一塁ベースコーチは送球に当たるのを避け

ようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁にまで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。

コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。

(3) 6・05(o)を追加する。

(o) 走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合。(7・11参照。走者による妨害については7・08b参照)

(4) 7・08(1)を追加する。

(1) 走者を除く攻撃側チームのメンバーが、ある走者に対して行われた送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合。(7・11参照。走者による妨害については7・08b参照)

(5) 7・11を次のように改める。

① 2行目のカッコ内を「ダッグアウト内またはブルペンを含む」に改める。(傍線部を追加)

② ペナルティを削除し、本文に次の文を追加する。

走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、打者はアウトとなり、すべての走者は投球当時に占有していた塁に戻る。

走者を除く攻撃側チームのメンバーが、送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなつて、そのプレイの対象であった走者はアウトとなり、他のすべての走者は妨害発生の瞬間に占有していた塁に戻る。

(6) 8・02(a)(1)を次のように改める。

投手が投手板を囲む18フィートの円い場所の中で、投球する手を口または唇につけた後にボールに触れるか、投手板に触れているときに投球する手を口または唇につけること。

投手は、ボールまたは投手板に触れる前に、投球する手の指をきれいに拭かなければならない。

~ (7) 8・05ペナルティ【注1】を削除し、【注2】を【注】とする。

2012年1月25日

以上

規則適用上の解釈について

8・01 関連 例題：走者三塁。投手がwindupポジションから投球動作を起こし、両腕を頭上に持っていったところで、三塁走者が本塁へ走ったのを見て、慌てて投手板をはずして本塁に投げた。これは投球か、送球か。

1月13日のプロ・アマ合同委で次のとおり確認された旨報告があった。

「2009年プロ・アマ合同委で、このような場合も不正規の投球とみなすとの結論を得ているが、その解釈を改め、投手が投球動作を起こした後、投球動作を止めて(ボーク)、投手板をはずせばその時点で即ボールデッドにして、以後のプレイはすべて無効にする。」その理由は、投手がボークをして、そのまま投手板を踏んだ状態で打者に投球することはできる(不正規の投球)。この場合、打者は打つこともできる。しかしながら、投手が投球動作を起こしながら、投球を中断して(ボーク)、投手板をはずせば、その時点でボールデッドにして、すべてのプレイをとめ、以後のプレイをすべて無効にするのが妥当と考える。投手板をはずした時点で即ボールデッドになるので、たとえばボーク後に本塁への悪送球といったプレイはもはや生じることはない。

★2012年度規則改正について

- ・規則改正は7項目（別紙参照）
- ・今回の目玉となった改正は、8.05ペナルティ【注1】が削除され、これまでの【注2】が【注】となったこと。

ペナルティ

本条各項によってボークが宣告されたときは、ボールデッドとなり、各走者は、アウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、ボークにもかかわらず、打者が安打、失策、四死球、その他で1塁に達し、かつ、他のすべての走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、本項前段を適用しないで、プレイはボークと関係なく続けられる。

【注1】

投手の投球がボークとなり、それが四死球にあたった場合、走者1塁、1・2塁または満塁のときは、そのままプレイを続けるが、走者が2塁だけ、3塁だけ、または2・3塁、1・3塁のときにはペナルティの前段を適用する。

↓

ペナルティと【注1】を読み比べると、誤解される文書となっているので、今回この【注1】が削除された。

(事例) 無死走者2塁、3ボール2ストライク、投手が身体の前方で完全静止することなく投球したため、ボークが宣告された。しかしこの投球がワンバウンドして捕手の後方に転がり2塁走者は3塁へ、打者は1塁へ達した。

【注1】からすると、ペナルティの前段を適用するとある。ペナルティの後段には、ボークと関係なく続けられるとある。

誤解を招く原因となることから、今回【注1】が削除された。

★規則適用上の解釈について → 別紙参照

★競技者必携の変更等について

13頁-2

〈改正前〉開会式は、ユニフォーム並びにスパイクで入場行進をする。(ウインドブレイカー等の着用、及び運動靴を禁止する。)

〈改正後〉開会式は、ユニフォーム並びにスパイクまたはアップシューズで入場行進をする。(ウインドブレイカー等の着用を禁止する。)

14頁-1

〈改正前〉その日の第一試合に～～(途中省略)～～、大会本部が用意する打順表(登録された者のうち出場予定の全員を記入したものを・・・・(省略))

〈改正後〉その日の第一試合に～～（途中省略）～～、大会本部が用意する打順表（登録された者の全員を記入したもの）を・・・・（省略）

14頁-2

〈改正前〉～～（前段省略）～～終了あいさつの間に、グラウンドに入り、外野側のベンチ横に用具を置きキャッチボールを行う。また、相手チームのシートノック中に外野のファウルグラウンドでトスバッティングを行ってもよい。

〈改正後〉～～（前段省略）～～終了あいさつの間に、グラウンドに入り、外野側のベンチ横に用具を置きキャッチボールを行う。また、~~相手チームのシートノック中に外野のファウルグラウンドでトスバッティングを行ってもよい。~~削除

14頁-3 ②追加 少年部・学童部はシートノック時の補助員はヘルメットを着用すること。

少年部・学童部はシートノック時

14頁-4-①

〈改正前〉試合に出場する捕手、およびブルペンの捕手は、ファウルカップを着用することが望ましい。

〈改正後〉試合に出場する捕手、およびブルペンの捕手は、ファウルカップを着用すること。
（ブルペン捕手ついて、平成24年度は準備期間とするが、平成25年度から完全実施。）

22頁-4

〈改正前〉連盟主催の全国大会（国体を含む）では、得点差によるコールドゲームは採用しない。

〈改正後〉得点差によるコールドゲームの採用

一般「九回戦」のすべての大会に適用一七回以降七点差

22頁 二、延長戦 1一般 【簡潔に掲載しますので、各自確認してください。】

（1）延長戦は最大十二回まで。ただし天皇賜杯大会と国民体育大会を除く。

（2）すべての大会において、試合開始後3時間30分を経過した場合は、新しいイニングに入らない。

（3）前記（1）（2）を終了しても同点の場合は、引き続き特別延長戦を行う。

25頁六 投手が野手に守備位置を変えたりするところ→→→参考事例を掲載した。

26頁九 最終回の裏、または延長戦の裏の決勝点→→→文書を簡潔化

27頁十三 監督またはコーチが投手のところへ行く回数の制限

→→→4を追加、少年部・学童部は監督に限る。

27頁十四 守備側のタイムの回数制限（新規追加）

野手（捕手を含む）【この逆もあり得る】が投手の所へ行った場合、そこへ監督またはコーチが行けば、双方一度として数える。 投手交代の場合は、その回数には含まない。〈投手交代時の野手1回はカウントする。〉

29頁十六 競技者のマナーについて

新規追加（7）野手が走者の視界を遮る行為【オブストラクションB項適用する】

- ①走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
- ②野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為

30頁十七② 少年部・学童部の投球制限

投手の投球制限については、健康維持を考慮し、1日7イニングまでとする。

なお、学童部3年生以下にあつては、1日5イニングまでとする。

投球イニングに端数が生じたときの取り扱いについては、3分の1回（アウト1つ）未満の場合であっても、1イニング投球したものと数える。

43頁 問2（規則違反のバット使用）と問3（規則違反のグラブ使用）の質疑応答を明確にした。

166頁 投球の判定・・・トラッキング重視を掲載した。

167頁 死球の宣告・・・「ヒット・バイ・ピッチ」で統一、デッドボールとは発しない。